

学校訪問旅行記(その二)

——アメリカの多様な施設を中心に——

村 田 修 子

アメリカは、私共には想像ができないほど人種問題が教育問題にのしかかってきているようです。小じんまりとしたユティカ

であるとしていることが、随所、随所でうかがわれました。

く、言葉を使うことの少ない家庭の二年生から六年生の子どもが、早く一般の子ども

市でも、七八%は黒人・プエルトリコ系の人といふことで、これらの人たちの生活は貧しく、その上子どもの数も多いので両親

言葉を豊富に使って正しく話せることは社会性の発達にもつながり、ひいては幸福な生活を営むことにかかわりがあるからです。

と同じレベルになれるように特別の指導をしているところで、ユティカからこういう子どもが集まってきて、学年に関係なく教育を受けています。診断をする本によつて、聞き方、読む力、記憶のテスト、視覚

とも働いている家庭が多いのです。従ってゆつくり子どもにふれている時間も少なく、話し合うことも仲々ないので、「言語生活が貧弱で現在は正しく話せる人が少なくなつた」とある先生がなげいていました。

これは市、州でもやっていますが、国の方針として取り上げられているのです。それで次にあげるような機関が設けられていたこともうなずきました。

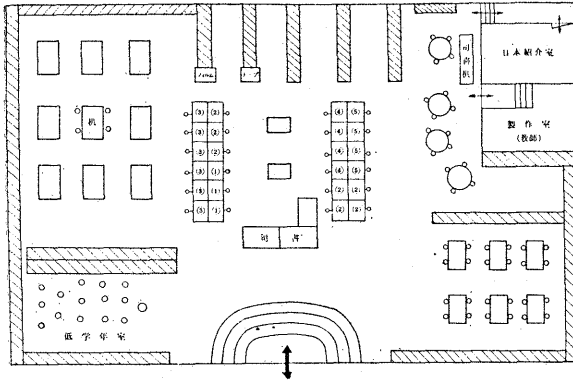
のテスト等をして発達の段階を調査し、個々のカルテを作り、それにもとづいて徹底した個人指導が行われます。私が見学したときは、六年生位の子ども

こうした現状から、話すこと、書くこと、読むこと、数えることの基礎を身につけさせ習慣化することが一つの大きな課題

オリディング・クリニック 知能は普通に発達しているけれども、言語生活が貧弱な子どもや、家庭環境が悪

が視聴覚のいろいろの機器を使つたり、学習しているものの関係図書を探したり、それについての質問を補助教員にしていた

◀メディア・センター



/// 図書資料

- ① フィルムストリップリデュー
- ② テープレコーダー
- ③ レコードプレーヤー
- ④ スーパーエイトカートリッジマシン
- ⑤ スライド映写機

り、そのわくの中で自由に活動している中から、交代で一人ずつ隣の机の先生のところへ行って指導を受けていました。また、プエルトリコ人が多いので、スペイン語も平行して指導し、その正しい読み方や書き方も人体の各部の名称を教材にしてやっていた。

もう一つこれと同じように、教材・教具を使って学ぶことを主体としたセンターが各学校にありました。

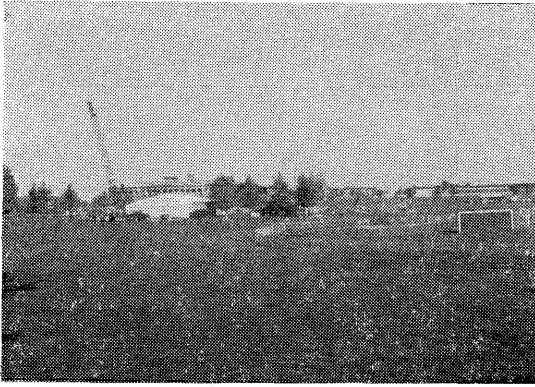
○メディア・センター

図を見ても分かるように、普通教室の七倍位の広さの中に、単に本がある図書館というイメージではなくて、子どもたちが持っている多様な関心、欲求を満たすために自由に利用できるさまざまな資料が整っていました。視聴覚センター、とでもいうものです。

今迄あげてきたこの二つのシステムからおし計ってみても、書くこと、読むこと、話すこと、数えることが如何に重要視されているか、ということがよく分かりました。見せて下さる側にしてみれば、いろいろな問題に対処させている方策などを見ても、いろいろいわけですから、どうしても指導している形のところは表面に出てくるので仕方がないことと思いますが、その中で子どもたちは自由に活動する形態をとりながらその課題に取り組んでいるにしては、余り楽しそうな顔付きをしていないことは少し気になりました。

空港についたとき広々としていることに感心したと同じように、すばらしく広くひらけた一面芝生の運動場のため息をついたのですが、その中にほんの少しの子どもたちしか見当たらなかったことは、うらやましいというよりは何となくもったいない

◀ 広々とした校庭



感じてした。

日本の先生方はみな思いは同じだったのでしょう。「ここへうちの子どもたちを連れてきて走り回ったり、ごろごろころがったりきつと目を輝かせて仲間やめないでしようね」とか「あの美しい紅葉した葉っぱを拾ってきて、毎日家に持って帰るでしゅうね」等々、絵のような景色の中に、るすをしていくれる子どもの姿を置いてみて、センチメンタルな感慨に浸ったこともありました。

国が違えばいろいろな制度が異なるのは当然です。アメリカの学校制度のうち私共の概念とちがうことは、キンダー・ガーデンに通っている子も、その他の施設に通っている子どもも満五歳になるとすぐ小学校にかようようになるので、そのどちらにも五歳児が存在しています。

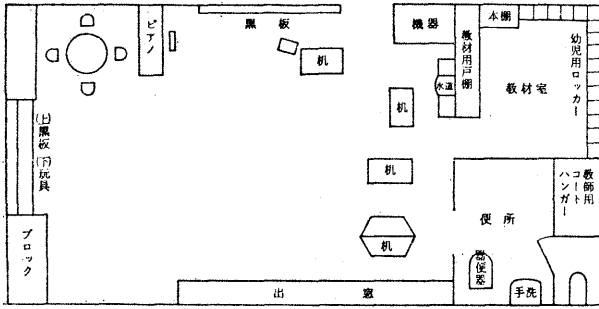
私共の視察団は、幼稚園関係の者のほか

に教育委員会や小学校の校長先生方がまぎっていらっしやったので、多分最初は「幼稚園班」に属されたことについて、物足りなく思われたかも知れないと思いますが、時がたつに従って、この団の参観計画の有意義さをみんな感じましたので、よくそのことについて話し合われました。極く少数であったにしても、幼児の教育について関心を持って下さった先生方がふえたことを、私はとてもよかったですと思いました。

それは、幼、小、中、高……の一つ一つの教育はそれぞれが孤立しているものではなくて、基礎となる前段階の上に積み上げられていくものですから、とかく横に線を引かれてしまいがちです。前出のマルチ・エイジ・グループ・ピングというのもそのへんを見ることができました。

そのほか設置者によって呼び方の異なる

◀ プロキュアールのプレイルーム



いろいろの施設を見せてもらいました。

○プレ・スクール

教会によってたてられたもので、利益を目的としない。

学校で教えるようなことは教えないで、大部分の時間は自由に遊ばせておいて、その中で筋肉の発達を促し、子どもの状態に応じた指導してゆく。

学校の方針として、学校と家庭を親密なものにすることに重点をおいている。

○プロキュアール

カトリック系の私立のミッションスクールである。

参観したあとの懇談会で聞いたことの内容容としては、

1 フリープレイを主体とする。……子どもに興味をわかせることや個性をのぼすために自分を中心になってアイデアを考

えて、自主的に、創作的にいろいろなことを体験させることにとめる。

2 毎日十五分間体育館で運動、あそびをする。

3 宗教関係のものを十分から十五分とり上げる。けれどもこれらはその時の状態によって予定が変更になることもあって、その場にあった適切な指導をする、ということである。

○F・E・A・T

Federal Educational Achievement Team
は、連邦政府が資金を出して、教育のため教師、教材を提供している組織です。

ユニイカで力を入れている読むこと、算数の方面について援助してもらっている、ということ、よく研究された教材、教具を使って、徹底した個人教授がされています。

◀ プロキユアルのフリープレイ



○ ヘッド・スタート

九月一日現在で四歳に達した、貧困家庭のためいろいろの面で自信をなくした子どもを対象に、一学級十五名位に教師一、ヘルパー一、ファミリーワーカー一、という陣容で指導されています。

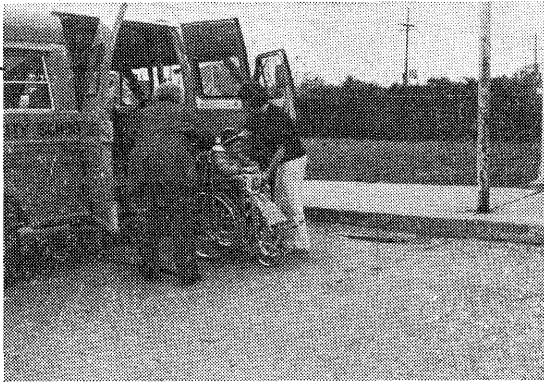
この名前を聞いたとき、私は全然逆のことを考えました。教育をして刺戟を与えることによってぬきん出るようにすることかと思っただけですが、説明を聞きますと、就学前の子どもたちがあるレベルに達するようにするために、みんなスタートで頭がそろるように設置されたのだそうです。これは本当に一人を大切にアメリカ的な考えであり、私のふと考えたことは、なんと日本の競争的な考えが身にしみこんだものだろうとわれながらあきれてしまいました。そしてそこでも黒人系の子どもが大部分で、スペイン語を使用している子どもが英語の単語のカードを目で見で指でたしかめ

てことばを覚えていたり、知能と関係が深い（と説明をしていた）マットでころがる遊びや円木の上を歩いたり、自転車遊びをしたり、ままごと遊びをしていました。その遊びはそれと目には日本の幼児がしている活動とちがわないのですが、そういう気持ちで見ると、その雰囲気はそういう遊びを学んでいる、という感じがしました。

全くアメリカの抱える人種問題の大変さを今更のように知らされました。

次に心身障害児のための教育機関、ハンディキャップについてですが、現在ユティカでは心身障害児と普通児は同じ場で教育するという方法はとられていないというところで、創立十年という連邦政府によって建てられたミッション・スクールの八つの部屋を見せてもらいました。

▲ハンディキャップの送迎バス



1 足の悪い子の歩行訓練をしている。補助歩行器を使って歩くのを一対一でしている。重症児二名に二人の教師が指導していた。

2 足が悪く、しかもIQ七五以下の子十名、教師三名（専任一名、他の二名は助手）。カップ、ということばを言わせる。実物にふれさせて訓練しているが、抱えなければ移動することができない子もいる。

3 2と同じで、クッキーということばの訓練で、一人が順番にみんなにクッキーをくばって歩く。クッキーをつまむこともなかなか困難であるし、倒れることもあるので、ヘルメットをかぶっている子もいる。三歳児四名、教師四名。

4 十歳から十二歳迄の六名、教師二名。足、耳が悪くて目が少し見える子が車椅子で一人でスライドを見てことばを覚えていた。気が散らないように、三面につ

いたてのようなものでおおわれたオフイスと呼ばれるところがあり、そこでそれぞれが活動をしている。

5 七歳から十歳の子六名、ティーチングマシンで発音訓練をしている。

6 心と体にハンディのある子六名、教師二名、歌いながら一人ずつ横に位置をかえて、ワン、ツー……を教えていた。

7 IQ二五―五〇の子十名、教師二名、フィンガーペインティングをしている。

8 IQ五〇―七五の七歳から十歳の子七名、教師二名。この子どもたちは「教育すれば救われそうな子」が集められていて、お面作りをしている。

ユティカの教育についての概要を第一日目の朝話されたとき、係の方が開口一番、「ユティカの教育は多様であります」とおっしゃった通り、こうしてあげてきただけでも十以上もありました。

そして、それらをすべて見るようにスケジュールが組まれていたので、午前二つ、午後二つ、それに加えて催しもの（市内見学、市長との会談とか個人の家の訪問）に参加したために、ともすると見せて頂いた学校や先生方が混乱してしまいました。

見学しているうちから心がけて、何等かの特徴を頭に刻みつけるようにし、意識的に手帖に絵を書いたりして、あとでそれを見たときに思い出せるようにしましたが、その日のことはその日のうちに整理してしまわないとだめでした。

* * *

このようにスケジュールがびっしりとつまっている、ということは、受け入れてくれる側が心を込めて全市をあげて歓迎してくれていることです。夜九時頃まで会合で世話をした下だった先生が、次の朝八時にはホテルのロビーに美しい顔をそろえ、

その日のスケジュールなど説明してくれて引続き一緒に行動してくれるのです。これが五日の滞在期間中ずっと続きました。

私は、若しこれが逆の立場だったとき、このような至れりつくせりのもてなしを、相手の心に響くようにすることができたらうか、と考えましたし、アメリカという国に対して抱いていた自分の感じが、何となくかわってきたことからして、ちょっとしたことでもその第一印象というものができてくるものだと考えると、恐ろしいことだとさえ思いました。本当に反省させられた人とのふれ合いの日々でした。

私にとってアメリカ人とのふれ合いのクライマックスは、個人の家庭を訪問した一夜です。

ユティカでの最後の夜、二名から四名のグループに分かれて、それぞれ指定された方の家を訪問しました。招待された家も多

種多様で、ある方たちは、訪問した家の老夫妻が競馬場（日本の雰囲気とは違い、食事しながら楽しむのだそうです）につれて行ってくれて撃駕^{げが}レースを見て、その方たちと同じように券を買ったら当たった、という方などがあつたりして、あとでそれぞれの経験はなしに花を咲かせましたが、私は四人のグループで、教育委員会のいつもお世話して頂いているエイクオラー女史のお宅でした。

私共がユティカに滞在し忙しく過ごしている間中、木々は紅葉し、到る処絵になるようなビューティフル・デイでしたが、その日も黄色に埋まったその中を迎えられた車で進むとき、

秋の陽のウォロンのため息の身にしみて

ひたぶるに うら悲し
鐘の音に胸ふたぎ 色かへて
涙ぐむ過ぎし日の想い出や



◀ エイクオラー女史宅訪問

げに我はうらぶれて

ここかしこ定めなく

飛び散らふ 落葉かな

(ヴェルレーヌ作、上田 敏訳、『海潮音』より)

御一緒の三宅先生の口から昔覚えた詩がほとぼしり出ました。何十年も口にしなかつたという詩が出てくる、ということも、

招待されているという心楽しき、リラックスした状態にあるときに、この美しさに感動してほとぼしり出たものと思われず。ユティカ郊外の林の中にある真白い家の前についたとき、「おお、ホワイト・ハウス」という感嘆の声にエイクオラー女史はじめ一同大笑い。そこで一緒に住んでいるという大柄な六十歳という陽気な方に迎えられる、家中くまなく(バス・トイレから寝室まですべて)案内して頂き、四人は片言英語で感心したり質問したり記念写真をとったりしてから、あらかじめ作ってあった

ごちそうを分担して持って、幼稚園の先生の家へ向かいました。

そのときも、鍵の二重になっている嚴重な様子とか、リモコンで開閉できるガレージのあけ方などまでも見せてくれました。ということとは、第一級のもてなしだということをおあとで聞きました。

訪問した先生の家には、三、四軒の家族が集まっていた用意が整えられていました。サンクスギビングが近いというので、それと総て同じように整えてくれたので、七面鳥の丸焼きも用意されていました。

建国二百年ということもあって、メイフラワー号の話の出ている本があって、三宅氏はエイクオラー女史のお友だちの方にかまって隣に掛けさせられて、一行ずつその本を読まされてしまいました。にやにや笑いなながらその様子を見ている他の三人の前で二頁ほど読むうちに、たまりかねて立ち上り「アイ・アム・ハングリー」とジェ

スチユアをまじえての叫びに、一同大笑いののち、お祈りからパーティが始まりました。

手製のかぼちゃのお料理、手作りのトマト、とっておきの貴重なお酒、等すべて心のこもったもてなしでしたし、その心づかいが胸にひびきました。たった三時間位の、しかも十分に話せない、両方とも首をかじげたり、絵を書いたりのひとつでしたが、別れの歌をうたう声がかすれ、涙を浮かべて別れを惜しんで下さる様子に、私たちも光景の霞む思いをしました。

右左のほほに、情愛のこもったキスを順々にしてくれました。

この心あたたまるもてなしは、学校を見たときより以上に人とのふれ合いの大きさ、不思議さを感じさせてくれました。

このひとこまの記録は、私にとって脳裡から一生消えることはないでしょう。

このハードスケジュールの中で、次第になれていった、とはいっても、初対面の人の多い旅行でそれとなく気をつかったことも、お互いのちょっとしたウィットによって随分気分がやわらぎました。アメリカへ向う機中で、

●「なんだか随分ひどい雨ですね」話しかけられた先生は「え!! 今一万メートルの上空をとんでいるんですよ」「ああ、そうだった」

●「日付変更線の上を通ったの知っていますか?」「いいえ、よくねていたものですか」とまじめに答えると、「ガタン、と音がしたのですが、分かりませんか?」「!!」(まわりの人も大笑い)

●空港で荷物を下ろしているところにセパードがいて、荷物の上を忙しくいつたりきたりしている。「日本では猫の手をかきながら、アメリカでは犬の手か!!」

これ等は最初の頃なのでやや固い感じが

しますけれども、このような会話や一人言がどんなに気持ちリラックスさせてくれたか分かりません。

ホテルのおじさんたちも、早朝荷物を運ぶのにエレベーターが仲々自分の階にこないときなど、腹を立てるより、「エレベーターはまだねている」等と気軽に言っているゆつたりとしている点などは、学校訪問とは別に、大変よい勉強になりましたし、異なった場での経験の大切さを感じました。(つづく)

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

